

聖書の物語と私たち ⑮
イスラエル王国時代その1
司祭パウロ鈴木伸明

最後の大士師サムエルの活躍

士師記の12人の士師の活躍に続いて、サムエル記上には最後の大士師となるサムエルが登場します。

サムエルは幼少期より、師である祭司エリのもとに預けられ、神様にも人々にも喜ばれる者となりました。ところがそれに対してエリの息子ホフニとピネハスは悪の限りを尽くしていたのです。

ある夜、神様は3度にわたりサムエルを呼びました。サムエルは、エリが呼んでいるのだと思い、エリのもとへ行くのですが、神様が呼ばれたことを知ったエリは、「どうぞお話しください。僕は聞いております」と答えるよう、サムエルに伝えます。

この「どうぞお話しください。僕は聞いております。」はよく知られている言葉です。皆様は、子どもが片膝を出して上方の光に目を向けて祈っている絵をご覧になったことがあるのではないと思いますが、この時のサムエルが描かれたものです。

この時に神様からサムエルに示された言葉は、悪を続けるエリの家に

対する裁きについてでした。サムエルはこのことをエリに伝えるのを恐れましたが、エリの強い願いによってそれを伝えることになるのです。サムエルの「神の声」に聞き従う、

大士師としての活躍の始まりでした。サムエルの活躍中ほぼ全期間、宿敵ペリシテ人との戦いがありました。神様への正しい信仰を保つことが戦いの勝利にもつながりますので、イスラエルにとって神様への信仰を深めることが何よりも大切な課題となったのです。

やがてサムエルも年老いてきました。サムエルは後継者として息子(長男ヨエル、次男アビヤ)を任命しますが、彼らは不正な利益を求め、賄賂を取って裁きを曲げてしまいました(サムエル記上8章1節から3節)。イスラエルにおける身分ある政治参与者であった長老たちはそれを見て、サムエルに願いを求めます。「あなたは既に年を取られ、息子たちはあなたの道を歩んでいません。今こそ、ほかのすべての国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください。」(サムエル記上8章5節)



塚 梢 画

サムエルは、これはイスラエルの上に神様が王として君臨しておられるのを否定するに他ならないと、彼らの悪を見抜いていましたが、「神の声」に聞き従いながらついに王をたてる決断をします。サムエルにとって少年の日の召命以来、「神の声」に聞き従うのが何よりも大切であり、自分の思いを優先させることはありませんでした。

サムエルはこうして「神の人、先見者(預言者)」と呼ばれるようになります(サムエル記上9章9節)。こうして最初の王としてたてられたのが、キシユの子サウルです。

サウル王の治世

ベニヤミン族に一人の男がいました。名をキシユといい、彼には名をサウルという息子がいました。美しい若者で、彼の美しさに及ぶ者はイスラエルには誰もおらず、民の誰よりも肩から上の分だけ背が高かったと言われています(サムエル記上9章1節から2節)。

サムエルは油の壺を取り、サウルの頭に油を注ぎ、王に任命しました。

この時用いられた「油」ですが、油は古代において唯一の外用薬であったことから、目に見えない神様の祝福と導きが含まれていると信じられていました。油を注ぐことは後に王の即位儀式の重要な部分になっていきます。また油を注がれた者をヘブライ語で「メシア」と言い、後に「救い主」という意味に発展していくこととなります。

サウル王は、宿敵ペリシテとの最初の戦いに勝ち、次に神は、アマレクとの戦いをサウルに命じられ勝利をおさめました。当時、戦いの勝利は神様によってもたらされると理解されており、すべて焼き尽くすことになっていたので、戦利品は神様のものであり、すべて焼き尽くすことになっていたので、サウル王は上等なものは惜しんで滅ぼし尽くさず、つまらない、値うちないものだけを滅ぼし尽くしたのでした。神様はこれを見て、サウルを王にたてたことを悔いられました。サウルは後悔しましたがもはや神様から赦しを受けることは出来ず、神様はサムエルに次の王を探そうに命じます。サウルの在位はわずか2年でした。

こうして探し出されるのが2代目の王となるダビデです。

(川越キリスト教会牧師)